

つながりで支えあう

会場の一つ、豊科・踏入の農園を訪れると、幅広い世代の来場者や生産者が声を掛け合っています。

「さつきより大きいのが取れたよ!」。「さすがに腰が痛くなつた」。

玉ねぎの収穫体験の参加者は、農業の楽しさと厳しさ、両方を感じている様子です。

「後継者不足など、農業経営が厳しい環境にあるなか、組織で農業を支えていこうというのが、この組合の趣旨」と話すのは、踏入ゆい倶楽部代表を務める小穴英明さん（南穂高）。

昨年4月に発足したばかりの踏入ゆい倶楽部は、市内に15ある集落営農組織の一つで、踏入区の38戸で構成。4・4畝の農

地で育てた玉ねぎのほかに、米、トマト、スイートコーンなども共同で生産しています。

昨年度、国は「戦後農政の大転換」と言われる新しい政策を実施しました。それは「品目横断的経営安定対策」と言われる政策で、日本の農業のぜい弱化が進む中、個々の品目に講じられていた対策を見直し、その対象をいわゆる「担い手」に限定することで安定を図ろうというものです。

踏入ゆい倶楽部などの集落営農組織も、その「担い手」の一つとして運営が注目されています。

小穴さんは言います。「いろいろな人がつながり、理解しあうことが必要で、このイベントのように、少しでも交流の機会を作っていかなければと思う」。

小穴さんは、農業を続けていくことは、景観や環境など、社会的な役割を担っていくことでもあると考えています。

この日、踏入の農園に訪れた金塚比呂美さんと娘の彩さん（豊科）は、以前から豊科に暮らしていましたが、今回、初めてイベントに参加しました。地元で育つ野菜に興味があったものの、チャンスに恵まれず参加

を断念していました。しかし、今回は彩さんとともに、地元の農園を見学し、普段できない体験ができたと話します。

「昨年は、収穫している所を横目に見ながら、うらやましいなあーと通り過ぎていました。親切にしてください、ご苦労も感じ取ることができました。収穫した玉ねぎは、大切に味わいたいです」。

笑顔に出会える幸せ。 玉ねぎ祭り。

